Ⅳ 他の久米家所蔵フィルム

久米正雄が撮影に関わり、久米家に残されたフィルムは「現代日本文学巡礼」のほかにも存在する。一つは「大正十三年頃のプライベートのフィルム」とされたもの、そして「玉川撮影記」として記述が残るものである。

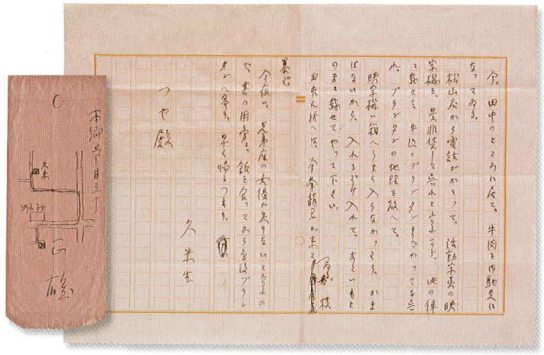
(1)「大正十三年頃のプライベートのフィルム」

撮影日時など詳細が不明な映像で、昭二のメモに「道楽フィルム　父親がまわしたもの　一九二四(大正十三)年頃のプライベートのフィルム」と記されている。その下には、「兄の洋行　東京駅→横浜埠頭」「劇」「多マ川の鮎」「芥川、菊地、左団治、松蔦他」とフィルムについての簡単な情報が記載されている。

このうち、最初のシーンのみ内容が判明しており、久米の兄・哲夫が洋行する際の一日にその記載がある。それによると、久米の兄・哲夫が洋行する際の映像であることが分かる。先ず、家を出るところから始まり、東京駅で列車に乗り、一行は横浜埠頭に到着する。そして、船を岸壁から見送る様子が映し出され、最後に船が出港する。

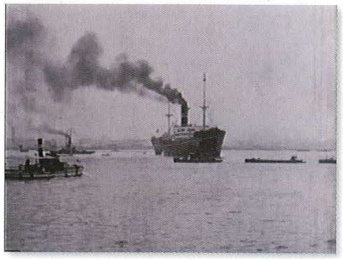
続いて女優が登場する劇のシーンがある。そして、川で投網を行うシーンに移る。これは多摩川のようである。

芥川・菊池が登場するシーンは最後に収録されている。先ず座敷の中の芥川と菊池から始まる。そして、場面が座敷から外に移ると、座敷から外に出る芥川と菊池も映る。四阿らしき場所ではタバコを咥える芥川がみられる。そこから、菊池が傘を持ち退出し、最後には車のシーンで完結する。



久米正雄　久米艶子宛書簡
映写機を送ることを依頼する内容

左端久米艶子。中央は久米哲夫か

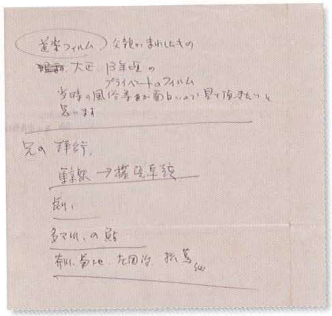


それから、東京驛から電車で、牛込まで行き、プランタンに松山君を訪ねた。此間、麻雀をしてみたところを、無理解な神樂坂署の手にかゝって、飛んだ災難に合ったのを、慰問旁々、彼處に置いてある、僕の活動寫眞映寫機と、フイルムとを持って歸るためだ。そのフイルムの中には、兄が横濱を出發する狀況を、三百尺ばかり實寫してあるので、歸朝して來た此際、兄や其の妻子のために映寫して見せる必要があったのだ。

(略)

八時頃から、やうやく待ち兼ねの活動を映し始めた。もう小さい子供の方なぞは、待ち草臥れて眠がってゐたが、お父さんの出る活動が始まると、さすがに大喜びだった。兄が家を出る所から、自動車に乘るところ、東京驛で電車して、見る見る遠ざかって行くところなぞは、大喝采を拍した。それから、電車内の大寫、横濱埠頭。船の甲板での別離。テイープの亂れ。打ち振る帽子。欄干によって、帽を振る兄の姿に、子供たちは歡びの叫びを上げる。いよ〳〵出帆だ。船の横腹から吐き出す水。船はだん〳〵岸壁を離れる。船尾の船名。見送り人へのカットバック。船は見る見る遠ざかり行く。…三百尺全一卷は忽ちにして清んで了った。

久米正雄『鎌倉生活の一日』『久米正雄全集』第十三巻より



「映画登場者一覧表」の裏に記された久米昭二のメモ

(2)玉川撮影記

久米が自ら撮影したものの中で、「現代日本文学巡礼」とともに撮影時の詳細な記録が残るものに「玉川撮影記」がある。一九二四(大正十三)年四月二十四日、作家たちが随筆社の主催で玉川遊びに参加し、二子玉川の亀屋で遊行した際のものである。その時の模様は『随筆』第二巻第五号の「玉川遊記」に記されている。同紙では、この時の模様を岡本一平が「文士玉川遊記繪巻」として描いている。

しかし、フィルム自体は接着してしまい、現在映写が困難である。僅かに確認できる部分をよく見ると、田山花袋と思われる人物等が収められていることが分かる。

一方、フィルムが元になったと考えられるスチール写真が多数存在する。スチール写真には、いずれも左右両端に剥がされたような痕跡が残っており、接着したフィルムを剥がしたものと思われる。

一行は、渋谷に集合し玉川電車で二子玉川へ向かった。参加者は、田山花袋のほか吉井勇・宇野浩二・葛西善蔵・中戸川吉二・久保田万太郎・加能作次郎・佐佐木茂索・近松秋江・水守亀之助・里見弴・中村武羅夫・久米正雄・田中純らである。

なお、徳田秋聲・谷崎精二も招かれていたが、家庭の用事で不参加であった。

スチール写真は、歩いている部分と、土手に座っている部分に大別される。後者は人物の配置から、それが1カットで撮影されていることが分かり、下の写真のように復元することが可能である。これは、久米の記述にある「土手に立つたり、腰を下ろしたりしてゐる皆を、パノラマで廻し撮る。」に合致している。

田山花袋をはじめとする「オール・スター・キャスト」の映画が封切られたかは記録が残っていない。

朝少し早く起きて、新聞小説を一回書いてから出掛けよう、なぞと思つて居ながら、とう〳〵癸く起きて、まだ顔も洗はない中に、隨筆社から迎ひが來た。が、徳田さんもまだ〳〵と聞いて、先に行つて貰ひ、十二時半頃、新聞は休む事に度胸を極めて、出かけようとする所へ、相憚いや、一度うまくプラトン社の根本氏が見えた。用談は立つて濟まして、早速根本氏の乘つて來た車へ、携帶の撮影機を擔ぎ込む。それから淺沼へ寄つて、フイルムを仕入れようと思つたら、四百呎の分ばかりなので、それをスペア・マガジンへ二百呎づゝ詰め替へるのに、彼是二三十分費し、淺谷驛へ急いでプラトンの車で騙けつけたのは、もう二時をすつと過ぎてゐた。

（略）

撮影機を玄關の傍へ立てたまゝ、二階へ上る。向うの正面に、田山さんの大きな顔と、近松さんの斜に構へたやうな顔が見える。みんな知つた顔だ。岡本一平君が、珍らしく來てゐた。里見君が、二人の小供を連れて來てゐた。

葛西君だの、宇野君だの、あんまりかう云ふ處へ、見えない顔も、面白く見える。

（略）

田中が、助手をやつて呉れるから、撮影を開始しようと云ふ段になつて、皆と一緒に亀屋を出て、磧土手へ出る。野道が川添ひに續いてゐる。所々の電柱が氣になるが、それが却つて中心になるやうな所でもあつて、謂はゞ鳥渡大陸的なロケーションだ。

土手に立つたり、腰を下ろしたりしてゐる皆を、パノラマで廻し撮る。

少し夕景で、顔は暗いが、背景から輪廓だけに抜けるだらうと思つて、皆の大寫を一人二人三人づゝ、收める。

田山さんにお願して、帽子をぬいで貰つたら、曇りを含んだ夕日の逆光線で、頭髪の端が白く銀色に光つた。その儘取れてゐたら素敵だ。

田山さんは、頻りに機械を珍らしがつて、僕の説明を聞いて呉れた。そして喜んで畫中に入り、映す所をよく見て居られた。何だか嬉しい氣がした。と同時に、俺もいつ迄も青年だが、田山さんは大きな子供みたいな氣がした。

全部で、三百五十呎ほど撮つた。十五六呎は機械の中でこくれて損をした。

歸つてから、酒席の事は、外に書く人があるだらう。

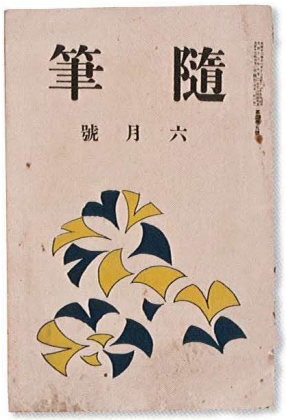
フィルムは、僕の無精で、まだ出來ない。出來たら、此の文壇のオール・スター・キャスト、玉川遊行全一巻は、改めて何處かで封切しよう。

久米正雄「玉川撮影記」『隨筆』第二巻第五号より

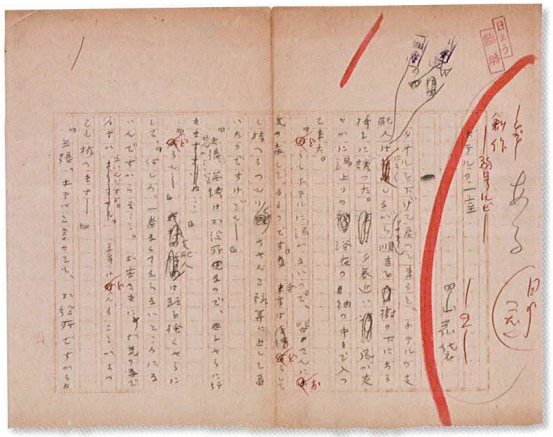
玉川遊行　左端:田山花袋

久米君の持つて來た活動寫眞の機械は大きな重いものだつた。『大變ですね。これを持つて來るのは?』こんなことを私は言つた。誰も彼も皆なその前に立たせられた。里見君が二人の可愛い男の兒と一緒に自轉車を乘廻した形も、葛西君がピイルのコツプを持つた形も、水守君や中村君が笑つたり帽子を取つたりした形もすべて皆なそのヒルムの中に入つた。私の白髪頭も近松君の洋服姿もやがてその中に入つた。『何うも廻り具合が變だね?たぐれてゐはしないか?』久米君がこんなことを言ひながら、蓋を取つて見ると、果して二三十尺ほどたぐれてゐた。『でも、大丈夫だ前に撮つた奴は大抵映つてゐる!』

田山花袋「二子の半日」『隨筆』第二巻第五号より



『隨筆』第2巻第5号
1924(大正13)年　随筆社
(山岸郁子氏所蔵)

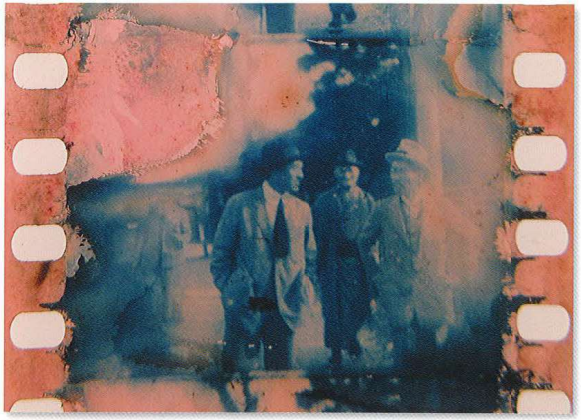


田山花袋　原稿「ホテルの一室」
『サンデー毎日』1926(大正15)年掲載

玉川遊行　田山花袋、久保田万太郎、吉井勇、宇野浩二、佐佐木茂索、里見弴、中戸川吉二ら

宇野浩二はこの遠足で、田山花袋氏に初対面したことなどは、忘れることの出來ない印象であつた。花袋先生と玉川の川原で初對面の挨拶をするなどといふのは、この上ないよい記憶であつた」と記し、葛西善蔵は「久振りで、花袋先生の温容に接して、懐しく思ひました」と述懐している。そして、二人の子供を連れて参加した里見弴は「特に子供たちのために用意して貰つたおかづがあとになつた。もう孫が二人おあんなさる田山先生が、幾度も女中にそれを俯促して下つた」と記している（以上『随筆』第二巻第五号）。

久米をはじめとする参加者の多くが、田山花袋との出会いは感慨深いものであつたと記している。



フィルム　後ろに田山花袋

フィルム
中央に田山花袋。右の二人の子供と並んでいるのは里見弴と思われる。フィルムは接着しているため、現在のところ全容を把握することはできていない

宇野浩二『文學の三十年』
1942（昭和17）年　中央公論社

活動写真をとる久米正雄
宇野浩二『文學の三十年』より転載

協力者一覧

本企画展の開催にあたり、次の方々および機関にご協力いただきました（順不同・敬称略）

久米　和子
山内　英正
武者小路実篤会
武者小路知行
宗像　和重
庄司　達也
山岸　郁子
阿部　知子
綾野　七恵
伊藤　陽子
木口　直子
久保　清子
小林　里穂
清水　想史
財部　智美
福島　さとみ
薮田　由梨
菊池寛記念館
新宮市立佐藤春夫記念館
田端文士村記念館
田山花袋記念文学館
調布市武者小路実篤記念館
徳田秋聲記念館

特別企画展 甦る文豪たち

発行日 | 2019年9月20日

発　行 | 郡山市こおりやま文学の森資料館
（公益財団法人 郡山市文化・学び振興公社）
〒963-8016　福島県郡山市豊田町3番5号
TEL.024-991-7610　FAX.024-991-7620
http://www.bunka-manabi.or.jp/bungakunomori/

FSC ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C001626
VEGETABLE OIL INK
紙へリサイクル可
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。